



石坂 孝雄



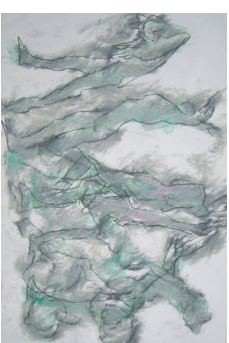
香川 久司



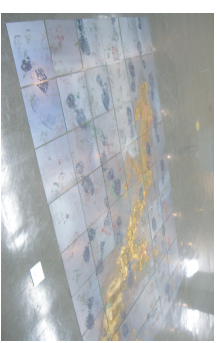
上原 二郎



井田 秋雄



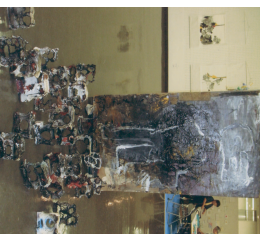
小用 喜好



金田 勉



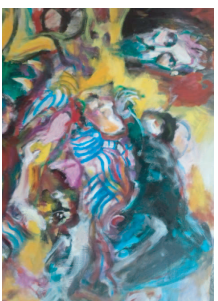
川村 圭三



“ちよっと深呼吸ただの自然現象何が悪いの”といった感じだろ。世界で稀にみる地震大国として小さな島国。そんな国に原発54基で世界第3位という。原発事故が起きても何の保険(補償)制度もない。考えてみるとめちゃくちゃで

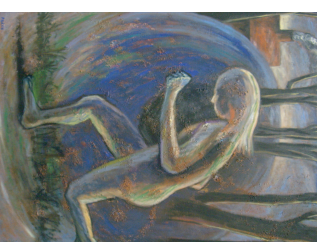
井上 活魂

福島第一原発事故。安全神話の崩壊であった。原発建設の時は東電の専門家も大丈夫だと言っていた。いざ今回の大災害が起きたら何の備えも出ていない。原発を襲う波の高さも想定外という自然の脅威にさらされた。自然様からすると



ARBETT MACHT FMI 洪 鯨井

人類科学の知性と技術が生んだ、不幸の「死の灰」の恐怖と不安が東日本大震災の過酷事故として、我々の目の前に再び牙を露出している。このことはまさに警告を無視した政治に対する不振と死の政治とは何かを、今もなお探求する時を迎えたことだ。こうした不安な地上の問題解決を抜きに混迷する現代の文化、芸術を、あなたに追求する者として、今敏智なるものを増やすすまじ磨かなければならぬだろう。そして今の仕事を少しでもましなものにしたいものだ。



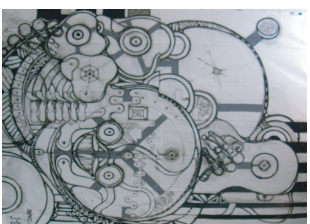
小山 景子



杉山 まさし



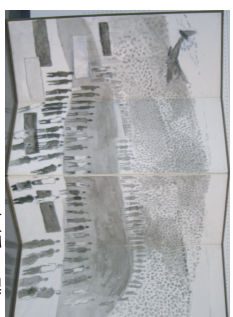
小林 繁和



児島 正俊



小池 仁



高橋 武



ひまわりは空高く咲く  
高橋 威足  
近所の小学生のプール訓練をおこなう歓声の音が聞こえ、夏休みが始まった事を実感させてくれる。原発の事故でプールはだいじょうぶかなど心配していたのでホッとする。学校へ行くと途中の道にひまわりの花が高く咲いて、夏の空に彩りをそえてその力強さは震災に負けず、がんばっている多くの人々を思いおこせ、私もがんばらなければという思いを強めます。

日々、なにが大切かを理解させてくれる時間の流れの中にあって。

水を飲む犬ー津波・地震・原発からのオアージュー

十藩 歌喜



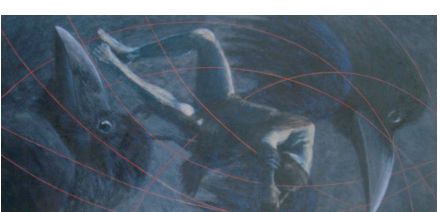
2010年作品

やはり今回のこの事態が引き起こした想念・観念から逃れることは出来ないと思った。たぶん、誰もが想うことだろう。それがどういふカタチになるか、そこに何ががあるのか。その現場・現象からただ思いいつくことは、やはり具体的なものではない、といったことになるのである。

愚段の、わたしのルーチンである日常のありようは「水を飲む犬」のカタチを借りて造形化することであったわけだが、しかもそれは、想いがかなり先行して、追いかけるようにカタチがいつも出来上がってぐる形象をとった。何がどう、といったことで説明はつかないしまたその気もない。画面に向かう時間経過が、わたしを突き動かしているのである。色も線もそのカタチも...であった。

未曾有の大震災、津波、これによる被害・惨禍、それも原子力発電所の破壊から“放射能”汚染・被害からの逃避・避難という、かつて被曝を経験したヒロシマ・ナガサキを繰り返す、やりきれない惨事となって迫って来た。

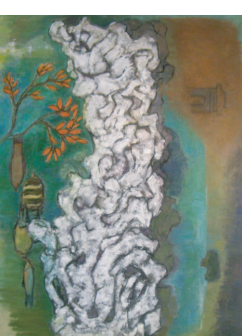
どうしようもないわたしの非力が、狭いアトリエに火がついたように、やりきれない憤り、やりきれない時間のもてあまい、そして、やりきれない造形化(?)に繋がる。



坪井 功次



阿成 光臣



鳴海 由光

この他に城田博己・坂元二の作品  
評論部として山手佐末・菊地明子